

パルタイ

倉橋由美子

PARTIEI

パルタネー

倉橋由美子

文藝春秋新社刊

パルタイ

著者略歴

昭和10年高知県土佐山田町に生れる。

明大文学部仏文科卒業

現在、同大学院文学研究科に在学。

昭和35年明大新聞主催「第四回学長賞

奨学懸賞」に「パルタイ」が入選。

東京都武蔵野市吉祥寺2554日向野方

一九六〇年八月二十日 発行

定価 二四〇円

著者 倉橋由美子

発行者 車谷弘

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

本文印刷 精興社
カヴァー他 凸版印刷
製本 矢崎製本

目次

バルタイ

7

非人

35

貝のなか

67

蛇

99

密告

171

後記

214

口繪写真
田沼武能

パ

ル

タ

イ

パ

ル

タ

イ

ある日あなたは、もう決心はついたかとたずねた。わたしはあなたがそれまでも何回となくこの話を切りだそうとしていたのを知っていた。それにいつになくあなたは率直だった。そこでわたしも簡潔な態度をしめすべきだとおもい、それはもうできている、と答えた。バルタイにはいるということ、きみの個人的な生活をすべて、愛情といった問題もむろんのこと、これをバルタイの原則に従属させることなのだ、とあなたは説明しはじめた。あなたは眼鏡を光らせすぎるので、そのむこうにある肉眼の表情がわたしにはよくみえない。あなたの歯がちがちと鳴るのは、できのわるいガイコツの咬合をみるようであり、あなたは不自然なほど興奮していたにちがいない。わたしはおもわず動物的な笑いをもらした。するとあなたはわたしの手を握った。いつものようにあたたくて湿っぽい。多少居心地のわるいかんじだとおもう。あなたはわたしの決心を確かめようとしていたらしかった。そこでわたしも、少しばかり大げさな身ぶりをとまな

うことばによってあなたを安心させる必要があった。

バルタイにはいることを正式に許可されるためとるべきいくつかの手続についてあなたは順序だてて話した。わたしはじつのところ、ほとんどきいていなかった。こうした事務的なことについてあなたがしめす熱心さは、わたしにはこっけいにみえた。《経歴書》の作成が手続のヤマだとあなたはいった。そして自分のばあい、《経歴書》はこうだったといい、あなたはぶ厚い書類の束をわたしのまえに置いた。それはなにかがうず高く堆積しているといったかんじでわたしのまえにあり、手垢と紙のいたみぐあい、バルタイのなかをとおりぬけて厳密な審査をうけたという権威ある確かさを保証しているかのようにみえた。そこに多くの他人たち——それが《組織》という名で呼ばれようと、わたしにはおなじことなのだが——撫でまわしたあなたの生活があるのだとおもうと、わたしは息がつまりそうなほど恥しくなる。おそらく《信じる》という赤あざのようなものがあなたの顔、そして目までもおおっているのではなかったら、あなたにしてもその《経歴書》がこっけいなものだということに気づくはずだと思う。

わたしたちはある部屋のなかにいた。それは壁の割れはじめた汚い部屋で、途方もなく巨大なビルディングのなかの迷路の奥にあった。あなたが最初にわたしをこの部屋に連れこんで以来、わたしは自分が奇妙なしかたで抽象化されてしまったことに気づいていた。わたしはめったに笑わなくなり、一定の筋みちをたててしゃべり、まれに笑ったりするときには一定の健全さでそう

した。かなしむということとはなかったし、それはこの建物のなかでは非常にばかげたことだった。つまりこの《寮》と呼ばれているビルディングに一步はいると《現実》は異臭をもった粘液質の世界にかわり、大小の部屋は厚い壁で区切りをつけられながらもかえてその壁を韌帯にしていたがいに結合されているので、それは暑苦しい空気のつまった細胞の集合体といった印象を与えていた。わたしはそのときもその細胞のひとつにはいりこみ、わたしのまわりで《学生》がめいめいの仕事をしているのを無視してあなたと話しあっていたのだ。わたしはいつかこの部屋の印象についてのべ、ここの空気は異常であり濃密すぎるが、どこか抽象的なのだといったことがある。しかしあなたは若干の質問をしたのち、わたしの印象を否定した。

要するに、とあなたはいった。わたしはバルタイの仕事に十分な経験をもっていない。そのことがわたしの自信に乏しい態度の原因だとおもわれる。あなたはそういつてわたしを慰めた。つまり慣れることが最上の解決になるらしい、とわたしもいった。それにしてもわたしはこの部屋にはなかなか慣れることができない。すこし人間が多すぎるようだし、かれらのたてる音と埃、それに人間が集団的に生活するときに生じる下半身の特別な臭気がわたしをいらいらさせる。わたしはまえから気になっていたが、壁や天井には《軍人勅語》が書きちらされてあるのだ。こんなことは《寮》にふさわしくないとはおもわなかつたとわたしは注意してやった。ときどき、この部屋に住んでいる《学生》の一人が、バルタイの歌を叫びだす。すると壁をへだてたあちこちの

部屋べやからいっせいに、それに類似した歌が発生するのは、わたしにはけっして慣れることのできない環境だとおもう。

そのころまで、わたしはあなたをほとんど完全な程度にあいしていたといつてよい。《完全》の定義はよくわからないが、あなたはたえずその《完全さ》をうけあってくれた。あなたは最初にわたしに会ったときからわたしに関心をしめしたし、わたしもすくなくらずそうだったので、しばらくたってから、わたしはあなたをあいしているといい、あなたもそれを認めた。そのときあなたはおびたらしい涙を流した。そしてバルタイ員である自分にもこんな人間的な涙を分泌させたのは、わたしであり、わたしの愛なのだといはった。それはその当座はわたしをいくぶん得意にした。しかしよく考えるとそれはひどく理くつにあわないことだ。第一、バルタイと人間的なものとの一致に感激するのはおかしいことだ。それからわたしはあなたの提案で、わたしたちがあいしあうことにきめたことを《なかま》の《学生》たちのまえで宣言し、祝福をうけた。わたしは屈辱でまっかになった。それにもかかわらずわたしが比較的長いあいだあなたをあいし、またなによりもそれを信じていたのは、わたしがこの抽象的な壁のなかにいたからにほかならないようにわたしはおもう。もしもわたしたちがもっと空気の軽いところにいて、お祭じみた日常生活のこまかなしぐさを共有していたら、こんなふうではなかっただろう。

ところで、そういうことまで含めてわたしの《経歴書》を書きあげるのは、わたしにとって

きわめて困難な仕事だった。というのは、わたしは自分の過去にほとんど興味をかんじないたちだったから。あなたはわたしに、できるかぎり克明に過去を拾いあげ、要約し、つなぎあわせ、ときには舌でなめして、ひとつの論理の筋をつくりあげ、それをバルタイにはいる動機に結びつけるようにと注意した。わたしが生まれたとき両親は死んでおり、貧乏をし、裏切られ、世の中の矛盾をわたしはわたしの皮膚で知った。だから、そういったことはわたしがバルタイにはいるべき十分な動機になりうるばかりか、わたしは過去のもろもろの経験によって、バルタイ員としての資質に磨きをかけられてきた、そんなふうを書くとい、あなたは説明してくれた。

それから数日後、しかしわたしは《経歴書》を書けそうにない、とあなたにいった。あなたはまた、わたしの過去を幼児時代から再現しはじめ、現在わたしがバルタイにはいる《必然性》のあることを論じたてるのだ。あなたの忍耐力には驚くべきものがあつたし、自分の過去がそんなにもあざやかにこねあげられることに、わたしも感嘆と多少の関心をいだかないでもなかった。が、とうとうわたしはあなたをさえぎった。問題はそういうことではないのだ、とわたしはいった。わたしの過去にいくらブラシをかけ折りめをつけてみたところで、《だから》わたしはバルタイにはいら《なければならぬ》というふうにはいえないだろう。わたしは過去によって自分を拘束し、裏づけすることにオントをかんじる。わたしは過去からぬけだして、未来へ身を投げたいとおもう。わたしはバルタイを選び、バルタイによってわたしの自由を縛ろうと決意した。

ここにはなんの理由づけもなく、なんらかの因果関係がわたしの決意をみちびきだしたのでもない。その決意がバルタイに受け入れられれば十分ではないか？　しかしあなたは反対した。あなたはわたしの議論を直観主義という名で呼んだ。それは危険な思想だというのだった。一個人がバルタイにはいるには、バルタイが承認しうるような客観的な《必然性》というものが要だとあなたはくりかえし注意した。

わたしは多少がっかりしたものをかんじながら、《寮》を出た。それから二時間ほど電車に乗って自分の部屋に帰ると、ただ眠った。そして朝の光がオレンジ色の希望を投げかけるころ、わたしは汗で湿った服をそのまま着て、また《寮》に出かけていった。わたしは仕事にはなかなか熱心だった。その日も午後からわたしはあなたと組んでK市まで行き、二、三の《組合》を訪問した。わたしはむしろほかの《学生》と組みたかったが、そんなふうにきまっていたのであとの祭だった。

二時ごろK市についた。曇天から薄日がさして蒸し暑かった。陸橋を渡りながら下をみると、貨物専用のレールがいくつかの立体交叉をなして放射状にひろがり、多くの《工場》へとひきこまれているのがみえた。街は狭くて、棚をなして海へせり出し、黒い鉄板をつぎはぎしてつくられた《工場》がつぎつぎと累積して建てこんでいるのは、全体としてみると、稚拙だが魁偉な偶像に似ている。あなたはいくつも電車を乗りかえ、鉄ばしごをのぼりおりした。《工場》はもと

もと不規則に仕切られた区画のなかに建てられ、それが横ばかりでなく上下にも建てまされた結果、たがいに他の区画にまで侵入しあい、ときには他の《工場》にのしかかったりしていたので、わたしたちはしばしば迷い、受持外の《工場》に踏みこんだ。目的の《工場》をみつけても、《組合》にうまく到達することは、さらに困難だった。門衛がわたしたちの身分と姓名をたずね、そのたびにわたしたちは偽名を考えなければならなかった。いまさらわたしたちに名まえをたずねるとは笑止の沙汰だったが、門衛はそれで満足して通行証を渡してくれた。《工場》にはいると、《組合》の所在を発見するまでにさらに一苦勞した。ときに《組合》はその《工場》のなかにはないことがあり、潮風のアたるゴミ捨場の横のバラックがそれであつたりした。だがほとんどのばあい《組合》はうすぐらい《工場》の建物に付属しており、そこに住んでいる《専従》たちは、くらがりから黄いろく光る目でわたしたちをみる。まるでフクロウのようだとおもつたが、あなたはこの比喩に機嫌をわるくした。もっともかれらはわりあい紳士的であり、それがわたしに《労働者》らしくない印象を与えたことは事実である。わたしたちの任務は、今度開設する《労働学校》について説明し宣伝するとともに、目下の《組合》の状況をさぐるということだった。あなたは終始にこにこし、出てきた《専従》たちに愛想をふりまいたが、わたしにはできなかった。しかしあなたは《工場》を出ながら、自分もあの《組合員》たちを完全に信頼しているのではない、といった。どんなばあいにもわれわれは階級的警戒心を失うべきではない。という

のは、かれらは《組合員》であるかもしれないし、そうでないかもしれない。《労働者》でさえないかもしれない。現実の事態はつねに複雑にもつれている、ただわれわれの実験的経験だけが本物の《労働者》とそうでないものとをみわけする試金石なのだ、とあなたはいった。もちろんわたしにとってそんなことは不可解であり、不可能なことでもあった。

わたしはわたしが所屬していたサークルについて若干のべておかなければならない。それは《セツルメント》という名で総称されているサークルの一つであって、わたしたちの《労働学校セツルメント》と呼ばれ、主としてK市の《労働者》のあいだにはいりこんで仕事をするものだった。このおなじ仕事をする《学生》のことを《なかま》といていた。わたしにはこの呼び名がいくぶん湿りをおびたものにおもわれる。それはあなたの手のように、熱く、汗ばんでいる。《なかま》ということばを口にするとき、わたしはほとんど、神のもとに友愛をとくある種の団体に所屬したようなかんじをもつのだ。ところでわたしにとって気がかりだったのは、この《労働学校》の《なかま》たちとバルタイとの関係である。むろん《なかま》のなかにはバルタイ員がいたことは確実だった。しかしだれがそうであるかは容易にわからなかった。《なかま》たちは例外なくバルタイ員であるような顔をし、事実バルタイにはいることを望んでいたといつてよい。しかし公式のばあいには、だれもかもバルタイ員でないというふうにふるまう。それは外にたいしては、ふつうの《学生》も《労働学校》に参加しやすい外観をもつたのだとわたしはおも